

巻頭言 「とぼしい時」

宇野 元

リルケといえば薔薇。庭のぼらの世話をしているときに、指を傷つけ、それが死の原因になった。そんな話も、この詩人を強く薔薇と結びつけています。

リルケは薔薇を題材にした幾つもの素晴らしい詩、また特異な魅力をもつ詩を残しています。初期の詩から、拙訳を記します。

最初のぼらが目覚め
おずおずと放つ香りは
微笑がにじむよう
透明な燕の羽根が
未知の日にふれる

以前、ある人の求めにこちらの勘違いと、身のほど知らずが加わって、ひと月かけて訳したものの一部です。リルケの詩のおもしろさは、卓抜な比喻によって、立体的な世界が築かれるところにあると思います。薔薇がふとあたりに芳香を放つ、きわめてデリケートな一瞬が、空間を渡る「透明な燕の羽根」となって、彫刻のような確かなものになっているのを感じます。

偉大な詩人にも、とぼしい時がありました。小説『マルテの手記』を発表したのち、晩年の名作が次々に生まれるまで、リルケがくりかえし深い淵のような時を過ごしたことが知られています。

彼のその時についておもいめぐらします。——それは、将来の豊かな時の備えのときであった。後から振り返れば、そう言えるだろう。いや、それ以上のものがある。じつはそのような多くの時が、かけがえのない人生のときである。よく生きる時であると。とぼしい時は、じつは豊かなときであると。

私たちの時と重ねて思いめぐらします。とぼしい、と思う時があります。物事が思うようにはかどらない時。いつまでも足踏みがつづくような時。梅雨の長雨のような時。……そのような時も、忍耐を学びながら通過するときとして与えられる。このことは、幸いな恵みであると思います。しかも、とぼしい時は、忍耐し、通過する時としてだけでない価値をもつ。恵みのなかにあり、恵みに支えられている。